《２０１２年６月　月例会報告》

【日　時】2012 年 6 月 29 日（金）　19：00～21：00（終了後は「ルン」～2：00 頃＝帰れない…)
【会　場】筑波大学附属高校 3F 会議室
【テーマ】アジアのサッカーあれこれ
【演　者】笹原勉（日揮）
【参加者（会員）12 名】阿部博一（日本サッカー史研究会）、安藤裕一（筑波大学ハンドボール部 OB）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、北原由（青梅 FC／都立武蔵附属中）、笹原勉（日揮）、佐藤真成（蹴球亭！）、白井久明（弁護士）、白髭隆幸（日本スポーツプレス協会）、関谷綾子（関谷法律事務所）、竹中茂雄（FC 品川）、中塚義実（筑波大学附属高校）、本多克己（シックス）
【参加者（未会員）1 名】国島栄市（ビバ！サッカー研究会）
【ルンからの参加者】庄司悟
【報告書作成者】笹原勉
注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

＊＊

アジアのサッカーあれこれ

笹原　勉（日揮）

＊＊

＜目　次＞

１．中国での体験
２．韓国での経験
３．インドネシアでの経験
４．J リーグのアジア戦略
５．アジアの日本人草の根サッカー

お集まりいただきありがとうございます。今日は、私の経験を中心として、「アジアのサッカーあれこれ」という題で話をさせていただきます。今回の発表のために、先月、今月と北京に「取材」に行ってきました。その成果も含めてお話しいたします。

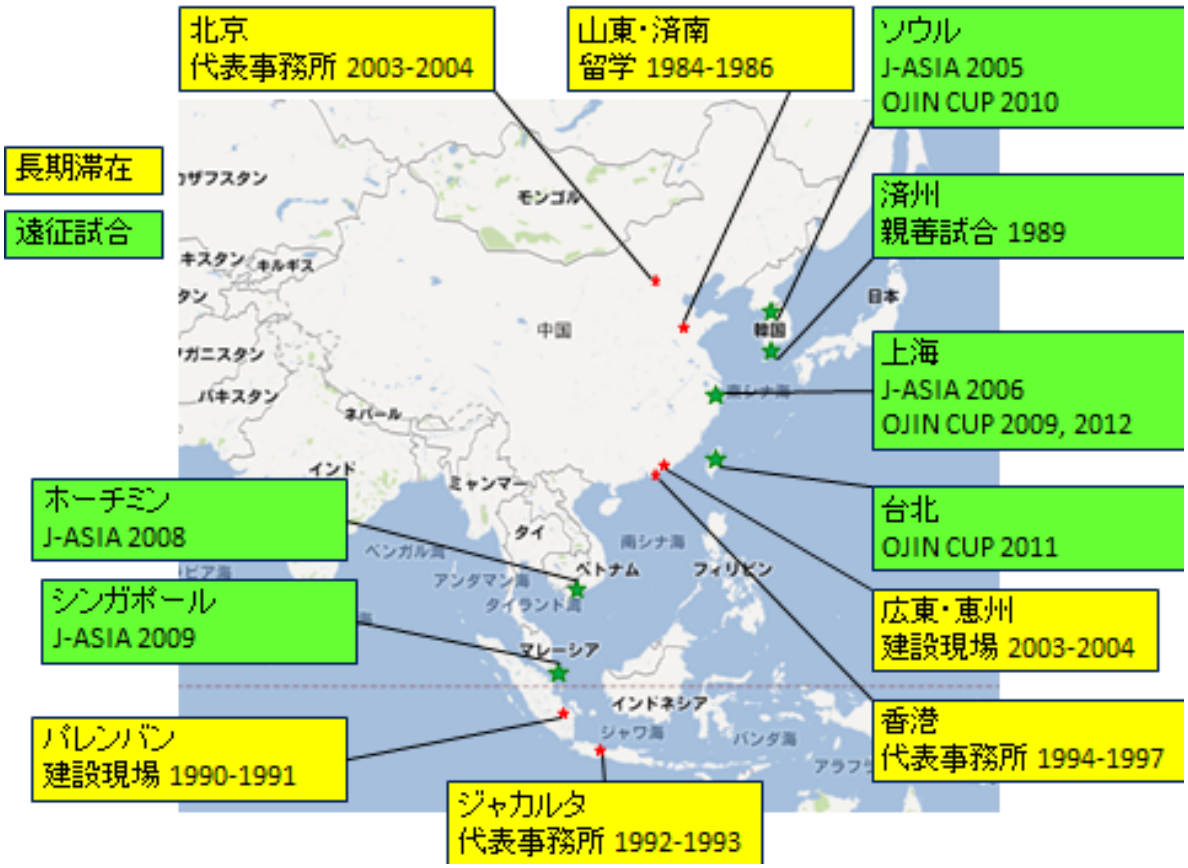
私は中学からサッカーをしていますが、所属していた中学、高校のサッカー部は弱く、大学でも同好会でしたので、決してレベルの高い選手ではありません。ただ、普通の選手と違うのは、海外でのプレー経験が多い点です。

まず、1984 年から 1 年半、日本の大学を休学して中国の山東大学留学。次は会社に入ってから、1990 年から 1 年半、インドネシアのパレンバンにある製油所建設現場に駐在、そこから横滑りで 92 年から

1 年間ジャカルタの営業事務所に駐在。帰国後 1 年半で今度は香港事務所に駐在して 3 年間滞在しました。香港返還を経験してから日本に帰国、5 年ほど日本で暮らしましたが、SARS の年に中国広東省の恵州にある化学プラント建設現場に駐在、1 年後の 2004 年から 6 年間、今度は北京事務所に駐在しました。

下の図の黄色で示したのが長期滞在の経験のある場所で、どこでもサッカーをプレーしました。その他に、学生時代の遠征や後でお話しする J-Asia Cup や OJIN Cup で、下の図の緑で示した都市にもサッカーの試合に行っています。

並みの J リーガーより国際試合の経験が豊富だと自負しています。(笑)



皆さんをアジアサッカーワールドにご招待しますが、こちらはその招待状です。1984 年私が中国に留学していた時、「足球世界」「世界体育週報」といった雑誌や新聞を定期購読していました。欧米のサッカー選手の名前やチーム名、国名などすべて漢字で書かれていました。以下は何を表しているでしょう？

国名：羅馬尼亜、波蘭、南斯拉夫

チーム名：国際米蘭、皇家馬徳里、河床

選手名：馬拉多納、済科、普拉蒂尼

(月例会では、ほとんどに正解が出た)

正解は国名：ルーマニア、ポーランド、ユーゴスラビア。チーム名：インターミラン、レアルマドリ、リバープレート。選手名：マラドーナ、ジーコ、プラティニ。

意訳と音訳が混在しています。ユーゴスラビアの「ユーゴ」は南という意味だそうです。

１．中国での体験

山東大学：留学生サッカーチーム組織

1984 年、私は中国の山東大学というところに留学しました。大学に到着して最初に行ったことは、留学生宿舎の壁に、サッカーチーム員募集の張り紙を貼ることでした。大学には日本人の他、姉妹校のエジンバラ大学から大勢やってきたイギリス人、フランス人、ドイツ人などがおり、すぐに留学生サッカーチームが出来上がりました。宿舎の隣の部屋にいたスコットランド人のハリーに、ユニフォームの背中に入れるチーム名を英語で書くか、漢字で書くか相談したところ、「帰国してから恥ずかしくて着られないので、漢字にしてくれ」と言われました。チーム名は「世界選抜隊」、今日はその時のユニフォームを持ってきました。

対戦相手は、大学近くの水道工事会社や、大学の学部のチームです。学内にある留学生宿舎からグランドまで歩いて 5 分くらい、音楽の得意な隣室のハリーが何故か母国からバグパイプを持ってきており、バグパイプを鳴らしながらの行進です。演奏していたのは、ダイヤモンドサッカーのようなイギリスのサッカー番組のテーマソングでした。おかげで沢山の見物客がグランドに集まってきました。

ハリーは音楽が得意なだけでなく、わがチームの得点王でした。

彼のもう一つの特技は、酔っ払い。トイレでも廊下でも寝ていました。

彼らと話をしていて知ったのが、イギリスは今でも強烈な階級社会だということ。トイレで一緒に写っているのは右ウィングのエイドリアン。いつもこんなことしてました。
【写真掲載不能】
それでも彼はかなりの貴族階級らしく、別のイギリス人留学生と付き合ったところ、「エイドリアンが彼女(階級が低いらしい)と付き合うなんで信じられない」と言われていました。

1984 年には、山東大学には北朝鮮の留学生が一人しかいませんでした。彼は普通に他の留学生と付き合っていました。ところが、1985 年に大勢の北朝鮮留学生が来ると状況が一変しました。金日成総合大学出身の通称「ボス」を中心に、全員が国旗と金日成バッチをつけ、誰かがバスケットボールをすれば全員がバスケットをやるという団結力。みなサッカーが好きなので、留学生チームはほとんど北朝鮮の学生に占拠されてしまいました。下の写真で外国人は後列左端の中国人のコック、前列左端の日本人マネージャーと右から 3 番目の私だけです。

彼らは、外国人と付き合わないということはなく、普通に話をしたり、自転車を借りに来たりしていました。ちなみに彼らは自転車に乗れず、校庭で練習してました。私が一番仲が良かったのが、下の写真で私が顔を抑えているチョン・ドンヒョ。右端が「ボス」です。ドンヒョはサッカーも一番うまかったので、北朝鮮の学校でサッカーの代表選手だったかと尋ねました。彼は、「国防運動」の代表だったとのこと。背嚢を背負って走ったり、障害物を乗り越えたり、匍匐前進したりすることが競技種目になっているのだそうです。

北朝鮮留学生との交流はとっても興味深いことがたくさんあるのですが、サッカーとは関係ないのでここでは説明しません。興味のある方は私のブログ「北京ひまつぶし」をご覧ください。

山東大学：校庭の自由なサッカー

私の前に中国に留学していた先輩から、中国の大学にもスポーツの大学代表チームがあり、先輩も参加したと聞いていました。ぜひ私も参加しようと放課後のグランドに行ってみましたが、まともな練習をしているような人はいません。いろいろな人が好き勝手にグランドを使ってます。中学、高校、大学と、グランドは部活動で使用するものと思い込んでいたので、ちょっとカルチャーショックでした。仕方なく私もドリブルしながらグランドを走ったり、リフティングをしていると、その内知らない学生から声をかけられ、一緒にサッカーをするようになりました。

この、校庭サッカーはとっても無秩序です。何人かが集まってチーム分けをし、適当に煉瓦を拾ってきてゴールにする程度なら日本でもよくやりますが、中国では、そこに後から後から、断りもなく新しい人が入ってきて、今まで味方だった人が突然敵になっていたりするのです。後から入ってくるのは最初に始めた人の仲間とは限りません。と思うと、別のグループが我々のコートの中にゴールを置いて、別の向きでミニゲームをはじめたりします。最初は大いに戸惑いましたが、慣れてくるととても便利です。一人でグランドに行っても、誰かがミニゲームをしているところに、ものも言わず入り込んで、パスを要求すればよいのですから。

もう一つ戸惑ったのが、みんなミスしても謝らないし、他の人にボールを拾ってもらってもお礼をしないこと。ミスしたら謝るどころか罵り言葉を吐いています。

こちらが私たちがプレーしていた大学のグランドです。20 年後の 2004 年に再訪しましたが、全然変わっていませんでした。ただ、隣に新しい芝生のグランドができていたのには驚きましたが。

山東大学：学部対抗戦

後程話しますが、中国の普通の中学や高校にサッカー部はありません。グランドでサッカーをしている学生も、ほとんどは基礎を教わっておらず昼休みサッカーのレベルなので、私もその中では一応上手な方でした。歴史専攻の留学生でサッカーの上手なのがいる、という噂が届いたのでしょう、歴史学部サッカーチームのキャプテンが留学生宿舎にやってきました。近々学部対抗サッカー大会があるので、歴史学部のチームに参加してくれとの話です。「歴史学部のチームは良いけど、大学のサッカー部はないの？」と聞いてみると、彼は大学代表チーム「校隊」のメンバーでもあるが、今は大会がないので練習をして、そのうちに声をかけるから、まず歴史学部で学部対抗戦に出てくれ、と信じがたいことを言います。それでも、中国人学生と一緒のチームでまともな対抗戦に出られるのは願ってもないことなので、歴史学部チームに入れてもらいました。

これは、歴史学部チーム(歴史系隊)のメンバーと、彼らの宿舎の部屋で撮ったスナップです。我々留学生は一人一部屋があてがわれましたが、中国人学生は 8 人一部屋で個人の机などありません。学部を代表して大会に出る選手には、ユニフォームとジャージが支給になります。「歴史」とか「数学」など学部名が書かれたジャージをよく見たのは、こういう理由だったのですね。

こちらが、大会でコーナーキックを蹴る私。若いですね。撮影は世界選抜隊のロバート。彼は留学終了後日本に遊びに来て、筑波の私のアパートに 1 週間ほど滞在しました。中塚さんとも一緒に酒を飲みましたね。

学内対抗戦において、歴史学部は二部。確かこの試合は三位決定戦で化学学部に負けた試合です。

ところで、この大会の注意事項で驚いたのが、革製のサッカーシューズ禁止という規則。日本から固定式のサッカーシューズを持参していたのですが、使ってはいけないと言われ、ゴムのスタッドのついたズックのサッカーシューズを買いました。ここで履いているのはそのシューズです。痛いだろうと思いましたが、そうでもありませんでした。

山東大学：校隊加盟

学部対抗戦が終わってしばらくたった後、歴史学部のキャプテンから、待ちに待った知らせが届きました。大学代表チーム「校隊」の招集です。歴史学部からは私を含めて 3 名、他にも、放課後サッカーで顔見知りの選手も多く、すんなり溶け込むことができました。

仲間から聞いてわかったことは、各都市に 1 つか 2 つ“業余体育学校”というサッカーの課外活動を行う指定校があり、校隊のほとんどの選手が、山東省各都市の業余体育学校から選ばれ、優遇を受けて入学したのだそうです。その他、体育の授業や学部対抗戦で目を付けられた数人が加わっています。レベルは、筑波大のサッカー同好会より少し上、といったとこでしょうか。

校隊に入ると、練習着、ジャージの他にシューズも配給になります。もちろん例のゴム製スタッドのズックで、こちらは白色なのでズックっぽさが際立ちます。それだけではありません。2，3 か月練習があった後、選手全員に「栄養費」という名目で現金が配られました。確か、30 元ほど。一般学生食堂の食事が 0.2～0.3 元ですから、かなりの金額です。私はこれでアマチュア資格を失い、オリンピック出場の道が断たれたと観念しました。

最初にあった大会は、済南市“三好杯”。これは、市内の大学(山東大学、山東体育大学、山東師範大学体育学部)の他に、２つの業余体育学校と、社会人のチームの混合大会です。わがチームは高校生に負けた記憶があります。

校隊の仲間は通常標準語で話してくれますが、試合中など興奮しているときは俗語や地元の方言が飛び出し、私が聞き取れずに失敗したことが何度かありました。三好杯の初戦、3 人の中盤が逆三角形のポジションを取り、私が右ハーフでした。後半にボランチの選手が交代し、入ってきた選手が「お前はヤウをやれ」と山東なまりで言います。“ヨウ”が右ですから、今までと同じポジションかと思いましたが、どうも新しく入った選手も右に寄っています。0-1 の敗戦後確認したら、“ヤオ(腰)”即ちボランチと言われたのでした。ボランチがいなければ負けますよね。ゴール前のフリーキックで、キャプテンがキッカーの私のところにやって来て「“打門”しろ」とささやき去っていきました。シュートが“射門”ということは辞書で知っていたので、そうでなければパスだろうと、ゴール前にロビングを上げました。得点はならず、キャプテンにも叱られました。“打門”は“射門”の俗語でした。
この写真は、翌年行われた済南市大学対抗リーグのハーフタイム。みんなが着ている緑色の布団のようなコートも、チームからの支給品。私は支給されることを知らずに同じものを買っていました。ハーフタイムの水分補給は、熱いお湯か大根です。前半が終わってベンチに戻ったら丸い大根を投げてよこすのでびっくりしました。割って食べるととてもみずみずしく、甘さもないのでなかなかよい水分補給になります。

大会は、体育大学、師範大学体育学部を除く、市内 10 大学の総当たり戦です。
このシュートは今でも鮮明に覚えている、私の生涯ベストシュートの一つです。残念ながらキーパーの正面に飛んでしまいましたが。

この大会では、乱闘事件を起こしてしまいました。確か山東美術学院か芸術学院との試合、6-0 でリードしていた後半、GK の前に出たスルーパスを私がスライディングでシュート。ボールはゴールに入ったのですが、突っ込んできた GK は間に合わずに私の膝に鼻をぶつけて鼻血を出してしまいました。私が GK に大丈夫かと声をかけていると、相手のディフェンダーがやって来て私を汚い言葉で罵ります。私も中国語の汚い罵り言葉は十分勉強していたので、思いっきり言い返したところ、ゴール裏にいた相手チームの応援団がグランドに乱入、私はスタコラ逃げました。その前に、接触プレーで両チーム退場者が出ていたこともあり、試合はそこで中止となり、6-0 で我がチームの勝利となりました。私のゴールは認められませんでした。実は、留学生チームで学生チームと対戦していた時も一度乱闘事件を起こしています。私も長いことサッカーをしていますが、試合中の乱闘事件は 1 年半の留学時に起こしたこの 2 回だけです。

私は、この大会に出場している唯一の外国人選手なので、他校の応援団の間でも有名だったようです。コーナーキックを蹴ろうとすると、周りで見ている人が声を揃えて日本語で罵ります。でも発音が悪く「パーカヤールー」と聞こえるので、全然腹が立ちませんでした。

いろいろありましたが、わがチームは全勝優勝。サッカー人生の中で初めての優勝はとっても嬉しかったです。

今日はその時のユニフォームを持ってきました。本当は返さなければならないのですが、特別に記念でもらったものです。「山東大学」の文字は毛沢東の揮毫です。

続いて山東省の選抜大会があり、皆で電車に乗って遠征に出かけました。場所は、高校の地理で習った勝利油田にある、華東石油学院。

この大会でも、中国の独特の習慣を経験しました。

まず、大学対抗戦なのに学生だけでなくコーチが参加すること。我がチームのコーチが GK だったことをこの大会で初めて知りました。それまで練習を全くしていなかったコーチは、胸に来た球を捕りそこなって、1 点献上していました。

大会中は華東石油学院の寮に泊まったのですが、ここには日本の大浴場と同じような施設がありました。しかし、監督の指示は湯船に浸かること禁止。筋肉が緩むからだそうです。監視されているわけではないので、私は浸かっていましたが。

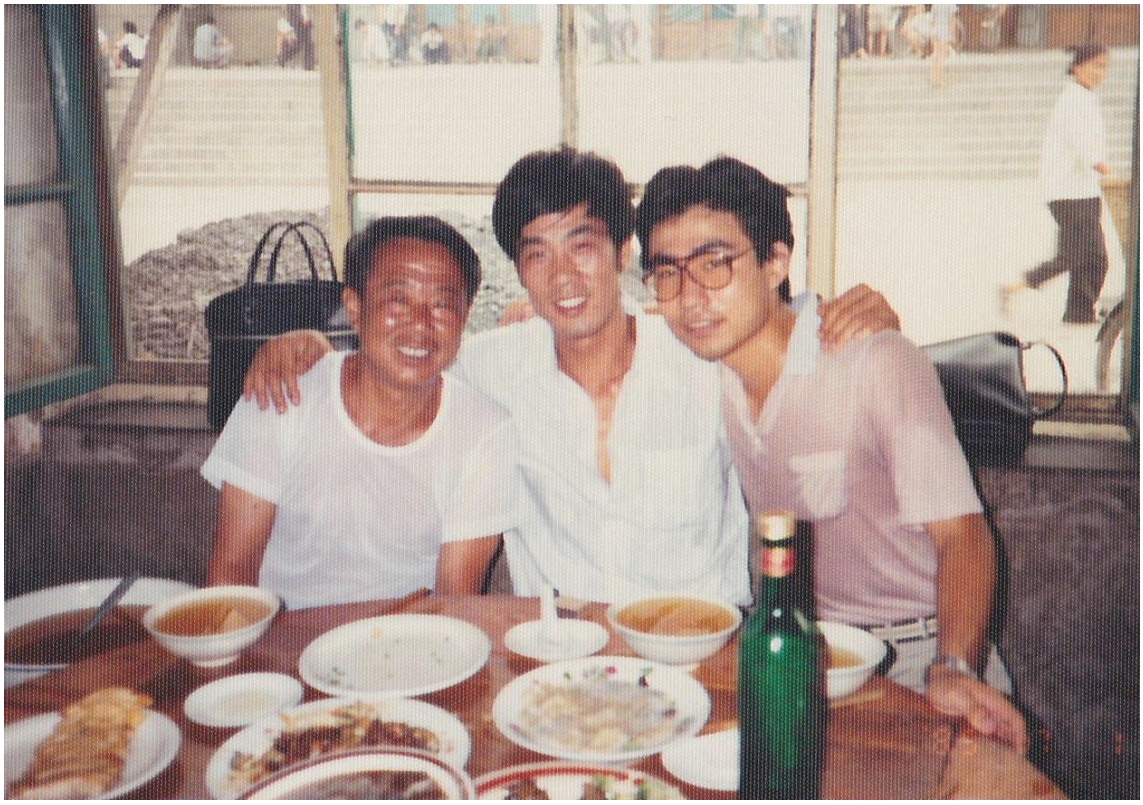
最後の試合で劣勢を挽回するべくキャプテンが試合中に取った措置が、大胆なポジションチェンジ。

スイーパー、ボランチ、トップ下、トップの 4 人が勝手にポジションを交換したのですが、結局試合は負けてしまいました。試合後、かんかんに怒った監督の命令は、「お前ら夕食抜き！」食事を大切にする中国ならではのペナルティでした。

こちらはその時の宿舎でのスナップ。後列の左から 3 人と私が、食事抜きのメンバーです。

大会終了後、大学の塀を乗り越えて油田地帯に入りこみました。当時はプラントエンジニアリング会社で働くなどとは夢にも思っておらず、興味本位で石油の生産設備を眺めていました。今では仕事でこんな場所に足を運びます。

こちらは、追い出しコンパの一コマ。どんぶりに入っているのはビール、左側の洗面器からお玉ですくって飲みました。私は当時ビールが全く飲めなかったので、代わりに葡萄酒(ワインと呼べるような代物ではない)を同じどんぶりで飲んでいたら、記憶がなくなってしまい、気付いたら 4 年生のキャプテンのベッドに寝かされていました。写真の左端が食事抜きを命じた監督で、真ん中が例の GK だったコーチです。



あの時から 27 年が経過、最近北京で買った雑誌を見ていたら、山東大学がフットサル全国大会で優勝したという記事を見つけてびっくり、更に、例のコーチが映っていてまたびっくりです。コーチのインタビューによると、フットサル専門のチームでなく、11 人制の校隊のメンバーがフットサルもやっているようです。白いユニフォームをよく見ると、我々の時と同じ毛沢東揮毫の大学名が使われています。後輩たちの活躍はうれしい限りです。

最新の雑誌や新聞を回覧しますので、ご覧ください。

80 年代の中国サッカー

今や、中国のスーパーリーグは飛ぶ鳥を落とす勢いですが、私が留学していた 80 年代にも、サッカーを含めて様々なスポーツの省対抗の全国大会がありました。各省を代表するチームに「八一隊(人民解放軍)」、「火車頭(国鉄)」などが加わって甲級（一部）、乙級(二部)の全国リーグがありました。山東省チームの本拠地に行ったことがありますが、入口に書かれているのは「山東省体育学校」。省の代表選手はトップもユース年代もこの体育学校に所属、衣食住をすべて提供され、給料をもらいながらサッカーをしていました。いわゆるステートアマです。同様の体育学校は省の下の各市にもありました。

こちらは、山東省ユースチームの選手たち。山東大学の私の宿舎に来てくれました。記念にユニフォームももらいました。

これら、トップ選手以外に、一般の大学や中学校、高校でプレーしているのは、全員アマチュア選手(業余運動員)。大学はともかく、普通の中学や高校にはサッカー部はありません。先に紹介したとおり、市内に競技種目ごとに重点校があり、そこだけに「業余体育学校」という、日本の運動部に相当するチームが設置されていました。

そして現在

ご存知の通り、中国のスーパーリーグには「上海申花」とか「山東魯能」などのように、省名、都市名と企業名がついています。中国のプロ化は、先ほどの各省代表チームが母体となって始まったからです。

現在プロリーグは超級(スーパーリーグ)16 チームと甲級(1 部リーグ)16 チーム。超級 16 チームには、日本のサテライトのような予備隊リーグもあり、若手選手だけでなくリハビリ中の選手などが参加しています。予備隊リーグがあるのは超級だけなので、トップチームが降格すると、予備隊リーグの参加資格がなくなります。

甲級リーグより下はアマチュアで、乙級 24 チーム、丙級･･･と続きます。

以上はトップチームの話。ユース年代は年間リーグ戦がなく、短期決戦の大会が行われています。

2009 年頃、中国のスーパーリーグは八百長問題で大きく揺れました。国際的な審判員などが逮捕され、胡錦濤国家主席がサッカー界の改革を指示するなど、大騒ぎでした。

その結果、現在中国サッカー界のトップである、国家体育総局足球運動管理中心の主任、兼、中国足球協会副主席/秘書長の座についているのが韋迪氏。彼は実は日本の筑波大学に留学経験があります。

86 年から 87 年ですから、中塚さんとかぶってますよね。

中塚：いやあわからんなあ。顔見たら思い出すかもしれん。

中国のトップリーグは、豊かな資金力を背景に華やかな発展をしているように見えますが、年齢詐称などもまだまだあり、選手育成や草の根サッカーは目も当てられない状況だそうです。そんな中、学校でもサッカーを普及させようと、韋迪氏などが奮闘し、教育部と、体育総局の横断的な取り組みも始まったようです。

しばらく前に NHK のプロフェッショナルで、岡田監督の特集をやってましたね。
現在、杭州緑城で岡田監督の通訳をしている鈴木稔さんは、私の北京駐在時代の少年サッカーコーチ仲間です。彼から聞いたのですが、中国でも、国営テレビ CCTV の人気番組「足球之夜」で“岡田武史在中国”というテーマで 3 週連続放映されていました。私も後からネットで見ました。それぞれ、“理想と現実”、“現実と妥協”そして“妥協と理想”という題名でした。上から押し付ける指導が一般的な中国において、選手に考えさせ、自主性を伸ばそうとする岡田監督の姿勢に焦点を当て、最初はうまくいかずにチームが最下位に沈んだこと、方針を変更して自分から指示を出してチームを浮上させたこと、そして指導が徐々に浸透していること、などが、選手のインタビューも交えて好意的に紹介されていました。6 月 23 日現在、岡田監督の杭州緑城は５勝３分６敗　１６チーム中８位です。
岡田監督以外にも、中国にはこんな人がいます。誰だかわかりますか？
巴蒂斯塔、特魯西埃、里皮、卡馬喬、蒂加納、庫澤、阿内爾加、徳羅巴
答えはこちらです：
バチスタ(上海申花監督)、トルシエ(深圳紅钻監督)、リッピ(広州恒大監督)、カマーチョ(中国代表監督)、ティガナ(元上海申花監督)、クゼ(天津泰達監督)、アネルカ(上海申花)、ドログバ(上海申花)

先ほど紹介した雑誌に面白い記事が載っていました。下の表は、各国リーグでのアウェーチームの勝率です。中国のスーパーリーグはアウェーの勝率が他のリーグより低いですね。大きな国土で移動が大変なことに加えて、サポーター組織の熱狂ぶりがホームチームに力を与えているようです。

客死中超
（アウェーが死ぬ中国スーパーリーグ）

リーグ	2012試合数	2012勝率	2011勝率	2010勝率
中国	79試合	18.99%	22.92%	24.58%
日本	97試合	36.08%	32.03%	31.05%
韓国	93試合	30.11%	28.33%	32.38%
イタリア	380試合	25.26%	27.37%	24.21%
イングランド	380試合	30.53%	23.68%	23.95%
スペイン	380試合	25.79%	27.37%	23.95%
ドイツ	306試合	28.76%	33.33%	31.05%
フランス	370試合	23.51%	24.47%	27.37%

中国から見た海外サッカー

中国でもサッカー観戦はとても人気があります。でも日本と違うのはナショナルチーム(国家隊)の人気がないこと。愛国心の強い中国人のことですから、大好きなサッカーのナショナルチームには大

きな期待を抱いているのですが、これがことごとく裏切られています。民間企業や政府が金を出して、少年、ユース年代の選手をブラジルやヨーロッパに長期派遣したり、個人としては何人もヨーロッパのトップチームでプレーしているのですが、チームとしてはからきし弱い。「もうナショナルチームの試合は見ない」と言っている中国人は決して少なくありません。でも、中継があればテレビをつけ、また失望する繰り返し。

ナショナルチームを見て楽しめない分、ヨーロッパトップリーグの人気はとても高い。普通の家のテレビでも、何十チェンネルも見られる中国では、いつもどこかのチャンネルでヨーロッパサッカーを放送してます。

雑誌や新聞の報道も海外のニュースが中心です。今回覧中の「足球週刊」誌では、95 ページのうち 70 ページが海外のニュースです。日本とは違いますね。

J リーグや K リーグの情報も詳しく、選手名はフルネームで書かれているので、私よりよっぽど日本選手の名前に詳しいです。

ちなみに J リーグのチーム名はこんな風に書かれています。意訳と音訳が混在してます。

札幌岡薩多	鳥栖砂岩	川崎前鋒	柏太陽神
広島三箭	横浜水手	清水鼓動	大阪桜花
浦和紅宝石	新潟天鵝	神戸勝利船	名古屋逆戟鯨
仙台七夕	鹿島鹿角	磐田喜悦	大宮松鼠
大阪鋼巴	東京 FC		

ところ変われば

さて、ちょっと時間をさかのぼり 21 世紀のお話。私は仕事で中国広東省の石油化学コンビナート建設現場に 1 年間駐在しました。お客さんは英蘭シェル、請負建設業者も日本以外にフランス、イタリア、スペインなどから来ていたので、建設期間中にお客さんが業者対抗サッカー大会を催してくれました。わが社も、現場に駐在する日本、シンガポール、マレーシア、フィリピン、中国の人々で選抜チームを結成、大会に臨みましたが、ビリから 2 番でした。この大会の他、夕方 4 時半には仕事を終えてしまう官庁関係者との接待もサッカー、我々の下請け業者による我々の接待もサッカーと、大変健康的です。中国のサッカー人気がお分かりになると思います。ちなみに我がチームは、接待をしてもされても、負けてばかりでした。

２．韓国での経験

「お達者くらぶ」韓国遠征

長いこと中国の話にお付き合いいただきましたが、これからアジアの他の国々の話です。

私は大学時代は同好会でサッカーをしていました。メインで大会に出場するのは 3 年生までなので、4 年生と大学院生で「お達者くらぶ」というチームを結成、茨城県社会人リーグに参加しました。

ある年の学内球技大会でのこと。私が助っ人参加していた韓国人チームが見事優勝、その祝勝会の席で、「笹原さんのチームで今度韓国遠征しましょう」と提案されました。酒の席なので、「ぜひ行きましょう」などといい加減に答えていたら、相手の康(カン)さんは着々と手配を進めてしまいました。私はあわてて人数をかき集め、1989 年 3 月、康さんを含めてぎりぎり 11 人でお達者くらぶ韓国済州島遠征が実現しました。

メンバーはバラバラで済州島入り、ソウル経由で入った私たち数名は、飛行機の故障で到着が遅れ、済州大学日本語課の女子大生との合コンに参加しそびれてしまいました。

翌日のサッカーの試合は、地元の高校生との対戦です。お達者くらぶというのは、名前はふざけてますが、決して弱いチームでなく、茨城県社会人選手権で 3 位になったこともあります。地元の高校

生に負けることはなかったですが、済州島の高校チームには完敗。

次の試合は、韓国で盛んな早朝サッカーの大人のチームが相手でしたが、こちらも敗戦。

試合は連敗を喫してしまいましたが、早朝サッカーチームとは、試合後に銭湯に行き、更にプルコギをつまみに乾杯。全員が初めての韓国を大いに満喫しました。

メンバーの中にはこの遠征で韓国が大好きになり、通い詰めるようになった人もいます。

３．インドネシアでの経験

パレンバンでのローカルサッカー

次はインドネシアです。私は、韓国遠征の直後に日揮という会社に入りました。関係のプラントを作るのが得意な会社なので、仕事の大半は海外。私も入社 1 年後にインドネシアはパレンバンの製油所建設現場に派遣されました。

パレンバンというところは、戦争を知る世代の方には、日本の落下傘部隊が降下した場所として有名です。落下傘部隊が占領したのが、パレンバンにあった製油所で、ここで生産される飛行機燃料が欲しかったのですね。我々の仕事は、この戦前からある製油所の改造工事です。現在は国営石油会社プルタミナの持ち物です。製油所に初めて着いた時には、教科書に載っているような旧式の蒸留塔から木が生えているのを見てびっくりしましたが、プルタミナ社発祥の地としてとても大切に使われています。

現場駐在の最初のころは仕事も暇だったので、宿舎の裏にあるスタンド付のサッカー場で一人でボールを蹴っていました。すると、どこからともなく現れた地元の若者たちが一緒にやるようになり、彼らの試合にも出してもらいました。

プルタミナ社は、地域社会を大切にするようで、12 月 10 日の創立記念日に合わせて、自社のグランドで市内サッカー大会を開催していました。私が参加していた地元のチームもこの大会に出場しました。インドネシア 6 番目の都市と言っても、1990 年のパレンバンはかなりの田舎で、娯楽などあまりありません。道には暇そうな大人がぼんやり座っているようなところです。そんなところでのサッカー大会なので、地元の子供たちが大勢観戦にやってきます。大会は本格的なもので、マイクで選手の紹介もあります。ここでも大会で唯一の外人選手だった私は、子供達の間で有名人となり、その後車で地元部落を通りかかると、遊んでいた子供たちが「ササハラ、ササハラ」と叫びながら後を追いかけてくるようになりました。大会の後には、チームのメンバーと一緒に村長さんの家にも招待されたものです。

さて、この地元部落、実はとんでもない部落でした。スマトラ島にあるパレンバンは、大きな川で海につながっているのですが、この部落はスマトラの海での海賊を生業としていると後で知りました。今回の改造工事の数年前にも、わが社は別の改造工事を請け負っていましたが、その時には現場に搬入されたピカピカの配管などが盗まれ、市内の市場に売りに出されるということが頻発したらしいの

です。サッカーでの貢献のお蔭かどうか、私の駐在中にはこのような事件はありませんでした。
　プルタミナ社の製油所代表チームにも声がかかり、近くの石炭会社との対抗戦に出場したこともあります。
　このころ、泥棒部落のサッカー仲間から「日本のチャンピオンのマツシタが試合に来るので見に行こう」と言われました。その年の天皇杯で松下電器が優勝していたので、アジアカップウィナーズカップに違いないと、市内のスタジアムに応援に行きました。対戦相手は地元にある大きな肥料工場プスリ社です。
　このスタジアムはひどいところで、観客席には鉄骨構造に木の板が渡してあるはずなのですが、その板がほとんどありません。鉄骨の上を歩いて客席にあがり、鉄骨の上に座って応援すると、下に子供たちがやってきて、酢漬けのマンゴーを袋に入れて売っています。一つ頂戴というと、袋を投げ上げるので、こっちもお金を投げ下ろす、といった具合です。建設現場は安全第一ですが、サッカー観戦はちょっと危険でした。
　で、私はつい先日までこの試合はアジアカップウィナーズカップと信じていたのですが、今回の発表のために調べてみると、この年、松下電器はアジアカップウィーナーズカップを辞退し、代わりに日産が出場して優勝しています。では、松下電器は何のためにパレンバンに遠征してきたのでしょう？今でもわかりません。

現在の国内リーグ

　当時のインドネシアの国内リーグは決して人気のあるものではなかったです。しかし、今は大変熱狂的で、ジャカルタに駐在している会社の同僚によると、試合のある日はスタジアムの周辺に近づけないそうです。去年の横浜フットボール映画祭では、「ロミオとジュリエット」というインドネシア映画が上映されましたね。ライバルチームのサポーター同士の悲しい恋物語でしたが、現在のインドネシアリーグの熱狂ぶりがよくわかります。そんなインドネシアの国内リーグに日本人選手が何人か参加しています。有名なところでは、元ジェフ千葉でオリンピック代表候補にもなった酒井友之や、東福岡高校から鹿島に入った金古聖司などがいます。酒井選手はブログを開設していますよ。

４．Ｊリーグのアジア戦略

　アジア各国は国内リーグが盛んになったとはいえ、やはり人気があるのはヨーロッパリーグ。どの国も高い金を払って放映権を獲得しています。このようにヨーロッパに流れているアジアサッカーマネーをアジアに戻すために活動を積極化しているのがＪリーグです。
　私が北京駐在中、現Ｊリーグ理事の中西大介さんが国際部長として北京を訪問、中国との提携を模索されていました。今回の発表前に中西さんとお会いし、Ｊリーグのアジア戦略を聞いてみました。
　アジア各国は、短期間でアジアのトップに上り詰めた日本のサッカーを高く評価し、そのきっかけがＪリーグにあると認識しています。「After 1993」という言葉をよく使います。そこで、Ｊリーグの管理ノウハウ、たとえば各国が持っていない試合スケジュールの組み方のノウハウなど、をアジア各国に提供し、アジアサッカー全体のレベルアップを図ろうとしています。
　Ｊリーグにとっての直接のメリットは、各国での試合放送も含めたＪリーグのプレゼンス向上、アジア選手の獲得（まだ J1 のレベルに達している選手は多くないそうですが)、そして若手のレンタル先、ベテランの働き場などＪリーガーの受け皿確保等です。
　具体的なアジア戦略のアクションとしては、新聞でも取り上げられているようにタイやベトナムなど各国リーグと提携関係を結び、Ｊリーグの試合を放映しています。回覧している資料に、Ｊリーグの試合を放映している国々が書かれていますが、あのアルジャジーラでも放映されているのにはびっくりしました。また、元ガンバの木場氏、元マリノスの丸山氏などをＪリーグのアンバサダーとして起

用、古いサッカーファンなら皆知っているタイの往年の名選手にもアンバサダーになっていただく予定です。今までは、ユース年代の J リーグ選抜チームはブラジルに派遣することが多かったのですが、今年は中国に派遣しました。

先ほど、インドネシアで活躍する日本人選手を紹介しましたが、アジア各国のプロリーグには驚くほど沢山の日本人選手が活躍しています。詳細な選手名は別紙に記載しましたが、ウィキペディアによると、こんなにたくさんいるようです。

インド(6)、インドネシア(7)、ウズベキスタン(1)、オーストラリア(12)、韓国(3)、カンボジア(1)、シンガポール(31)、スリランカ(1)、タイ(23)、中国(1)、ネパール(1)、フィリピン(2)、香港(3)

５．アジアの日本人草の根サッカー

J-Asia Cup

アジアのプロリーグで多くの日本人がプレーしていますが、草の根レベルではもっと多くの日本人がアジアで活動しています。大きな都市にはほとんど日本人チームがありますし、私の例を見ても分かる通り、小さな都市では会社や地域のローカルチームに参加している方々も少なくありません。

そんな、アジアの日本人サッカーチームが年に一度、一堂に会して、技と力と酒量を競う大会があります。“J-Asia Cup”という大会です。J リーグが始まったのと同じ 1993 年にシンガポール、バンコク、クアラルンプール(KL)の 3 チームで始めた大会は、今年 8 月に予定されている第 18 回のジョホール・バル大会には 16 チームが参加予定です。

大会はすべて参加チームの自主運営。土曜日の一日で優勝から最下位まで順位付けを行うので、どのチームも 20 分の試合を 5 試合以上こなさなければなりません。最下位まで順位付けを行うのは、試合数を均等にするだけでなく、もう一つの大きな理由があります。幹事未経験の最下位チームは翌年の大会の幹事を担当しなければならないのです。グランドを 2 面以上確保し、ホテル、移動のバス、昼食、表彰式/懇親会会場などあらゆる手配を行うのは、並大抵のことではありません。そのため、最下位決定戦はことのほか白熱します。

私がジャカルタや香港の日本人チームでプレーしていた時は、まだチームが大会に参戦しておらず、初めて出場したのは、北京駐在時の 2005 年の第 9 回ソウル大会です。

早朝、選手を乗せたバスは、2002 年のワールドカップでも会場となった水原スタジアムに着きました。

使ったのはサブグランドでしたが･･･

大会の費用は各チームの参加費だけでなく、スポンサーからの協賛金で賄われます。
このように、多くの企業から協賛金をいただいています。当然、協賛金集めも幹事チームの仕事です。

こちらは、2008 年サイゴン大会と、2009 年シンガポール大会のスポンサーの看板です。一目でお気づきと思いますが、企業数が多いはずのシンガポールでスポンサーが少ないこと。

何故かというと、2008 年後半のリーマンショックの影響で、多くの企業が協賛金を払えなくなってしまったのです。

J-Asia Cup の強豪チームと言えば、昔はシンガポールやバンコク、今は上海が台頭しています。日本企業が多く進出している地区ほど強くなります。

このように、サッカー大会もアジア経済の影響を強く受けているのです。

<u>OJIN Cup</u>

さて、アジアの各国では若手に交じっておじさんプレーヤーもまだまだ頑張っています。J-Asia Cup に遠征するのはつらいけど、まだまだやるぞというおじさん達が、2005 年に四十雀版 J-Asia Cup を始めました。その名も”OJIN CUP”。”Overseas Japanese International Cup”の略ですので、誤解しないでください。

こちらは、2010 年の大会に参加した、北京チーム。お腹が気になるところです。

運営方法などは基本的に J-Asia Cup と同様ですが、以下のような特別ルールがあります：

- 参加資格は 40 才以上か、なでしこ
- 36 才以上のオーバーエイジ枠（同時出場者数制限あり）
- 各種表彰の他に最高齢得点賞

昨年の台北大会で一つサプライズがありました。日本サッカー協会の小倉会長が、ポケットマネーで優勝トロフィーを贈呈してくれたのです。

そして、今年の 4 月に行われた第 8 回上海大会。北京チームは単独で人数を揃えることができず、天津と合同の「華北」チームで参加しましたが、見事に優勝を遂げました。常日頃から 50 度以上の白酒で鍛えられている華北チームは、夜の部では毎年大活躍だったのですが、ついに昼の部でも優勝の栄誉を勝ち取りました。
左のワールドカップを模したものが大会の優勝カップ、右のガラス製が小倉カップです。

以上で、私のお話を終わりにさせていただきます。
ご清聴ありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

発表後にはいろんな質問や感想がありました。「ルン」でも大いに盛り上がりました。
盛り上がりすぎて、ここには書ききれません。よって省略です。
学生時代の話は、アホらしくて懐かしくて、今とのつながりも感じられ、いいですね。

（この部分のみ、文責：中塚）